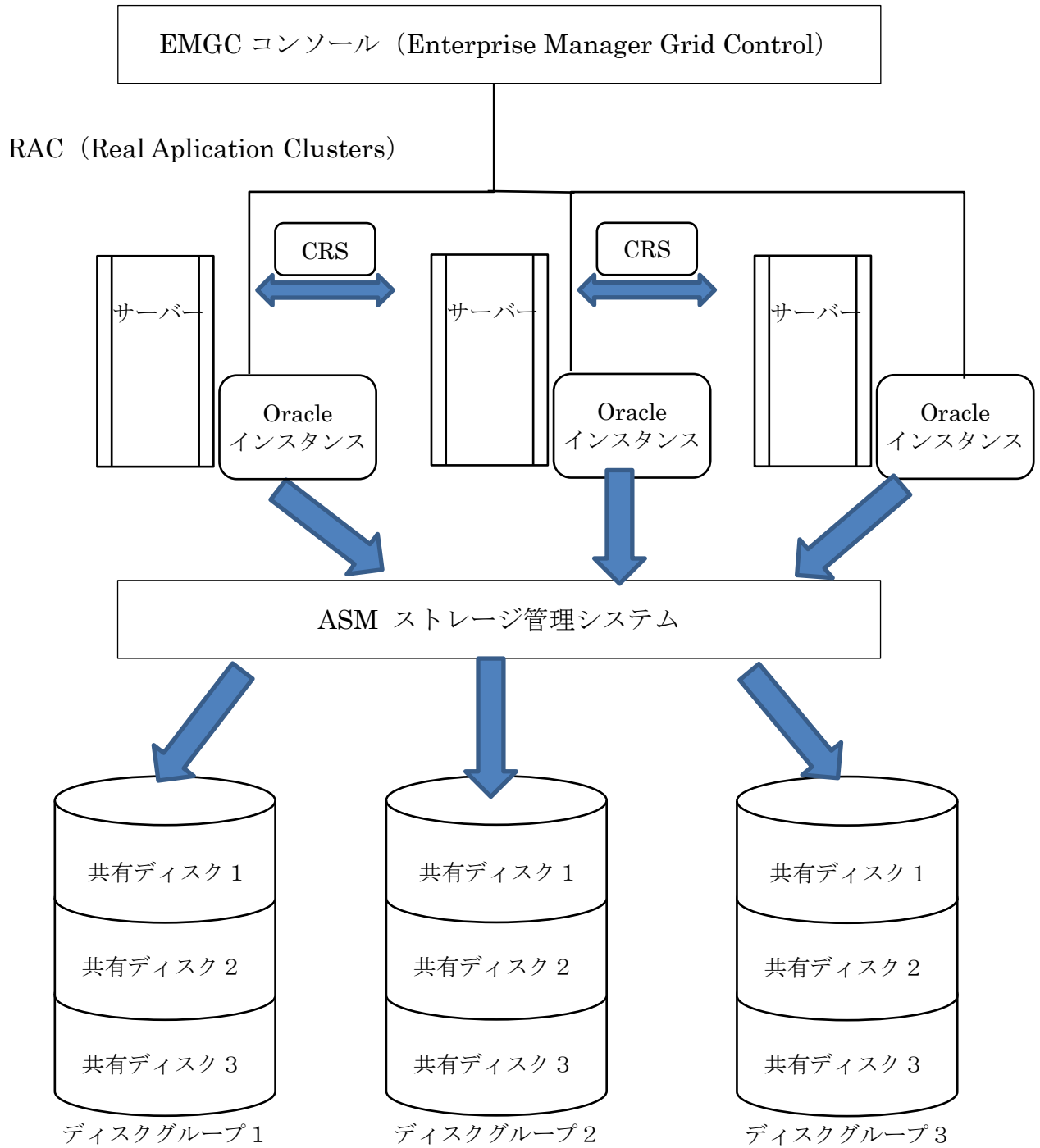


Oracle Enterprise Grid システムでのファイル配置構成

(複数サーバーによるオラクルによる障害対策冗長化システム、および負荷分散)

【Oracle Enterprise Grid システム・アーキテクチャ】



【RAW デバイスの作成方法】

コントロール・パネル → 管理ツール → コンピューターの管理 → 記憶域

ここで、拡張パーティションを作成します

さらにそこに、論理ドライブを作成します

※ この時に「ドライブ文字またはドライブパスを割当てない」を選択して、フォーマットも行いません

【CRS が使用する共有ディスク】

複数のサーバーから同時にアクセスできる共有ディスク装置が必要です

なお、共有ディスク装置はネットワークストレージ (NAS) では対応不可です

SAN ディスクが必要です

共有ディスク装置に配置するもの

- ・ 投票ディスク パーティションが分かれた 3 個
- ・ OCR プライマリー
- ・ OCR ミラー
- ・ データ (CFS)

【CRS が管理するデータ (CFS) ・ ディスクの使用目的】

CRS 間で使う個別に必要なデータが出来た場合に、この領域を使用する

オラクルの個別インスタンスに必要な表領域用物理ファイル、コントロール・ファイル、初期化パラメーター、Redo ログのファイルを配置する場所ではない

\$ORACLE_BASE と \$ORACLE_HOME ディレクトリについても、ここには配置しない

【Oracle の個別インスタンスが使うファイルのディスク配置】

Oracle の個別インスタンスが使う表領域用物理ファイル、コントロール・ファイル、初期化パラメーター、Redo ログのファイルを **ASM** (自動ストレージ管理) が管理している論理ストレージに配置することにより、Oracle インスタンスの**物理サーバー間移動**が、可能になる

CRS が管理する CFS フォーマットの共有ディスクには、配置しない

【サーバーのローカル・ディスクに個別に配置するファイル】

\$ORACLE_BASE と **\$ORACLE_HOME** ディレクトリである

これらのディレクトリは、インスタンス固有のデータとは無関係なため、データ・ファイルと別ストレージでの配置が可能である

なお、この2つのディレクトリは、ASM（自動ストレージ管理）が管理している論理ストレージに配置することは出来ない